

文化芸術教育の充実・改善に向けた検討会議（第４回）

次第

日時：令和５年１０月１０日（火）14:00～16:00

場所：文部科学省５F６会議室（対面・WEB会議の併用）

１ 開 会

２ 議 事

（１） 文化芸術教育の充実・改善方策について

（２） 中間整理（たたき台）について

３ そ の 他

４ 閉 会

<配布資料>

資料１ 福島県 大熊町立学び舎ゆめの森（義務教育学校・認定こども園）
南郷市兵 園長・校長 提出資料

資料２ 中間整理（たたき台）



学び舎 ゆめの森
Manabiya Yumenomori

演劇・パフォーミングアーツの力

共生社会・創造社会の資質・能力の育成

2023年10月10日

福島県 大熊町立 学び舎 ゆめの森 校長・園長
南郷 市兵

南郷 市兵（なんごう いっぺい）

義務教育学校・認定こども園

福島県大熊町立学び舎ゆめの森 校長・園長

早稲田大学環境総合研究センター招聘研究員

（前）福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校 副校長

（元）中央教育審議会教育課程部会専門委員

2001年慶應義塾大学総合政策学部卒業。株式会社インターネットイニシアティブ（IIJ）勤務を経て文部科学省入省。

東日本大震災後は、被災三県の自治体との連絡調整を担当。震災を契機とした新たな教育の創造を目指した「創造的復興教育」を推進。福島県双葉郡の教育復興に携わり、ふたば未来学園の開校準備も担当。2015年4月、福島県立ふたば未来学園の開校と同時に副校長として着任。同時に中央教育審議会教育課程部会専門委員を務める。2023年4月、12年の避難生活を経て帰還した大熊町立学校及びこども園の校長・園長に着任。

著書に、『学習指導要領の未来』（寄稿、2021年9月、学事出版）、『「アクティブ・ラーニング」を考える』（寄稿、教育課程研究会 編、2016年9月、東洋館出版社）、『希望の教育』（文部科学省創造的復興教育研究会 著、2014年3月、東洋館出版社）等。査読論文に『防災・復興教育によるVUCAな時代を生き抜く能動的市民としての資質・能力の育成』（「社会科教育研究 No. 146」、日本社会科教育学会、2022年）。



学び舎 ゆめの森
 Manabiya Yumenomori

- ## ○ 両校所在地及び郡内高校の状況

凡例

- 帰還困難区域
- 旧居住制限区域
- 旧避難指示解除準備区域
- JR常磐線(2020年3月14日全線開通)

※JR常磐線の線路、双葉駅(双葉町)、大野駅(大熊町)、夜ノ森駅(富岡町)の駅舎及び周辺の道路等は避難指示を解除

浪江高校津島校

浪江高校

双葉高校

双葉翔陽高校

大熊町立学び舎ゆめの森
(2023年度帰還)

(富岡高校川内校)
(2011年3月閉校)

富岡高校

20km

県立ふたば未来学園中高
(2015年度開校)

○ 双葉高校
○ 浪江高校
○ 浪江高校津島校
○ 双葉翔陽高校
○ 富岡高校

H28年度で休校

○ ふたば未来学園高校 H27年度開校

※カッコ内は現在の移転先(サテライト高校として開校)

- ## ○ 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

- ✓ 総合学科高等学校及び併設中学校
- ✓ 震災後に双葉郡 8 町村教育長が中心となり検討した中長期的な教育復興ビジョンにおいて開校が提起
- ✓ 2015年に高等学校が、2019年に併設中学校が開校。同時に双葉郡に所在した 5 校の県立高校は休校に
- ✓ 生徒数約600名（各学年定員は中学60名、高校160名）

大熊や双葉郡で育むべき資質・能力とは



学び舎 ゆめの森
Manabiya Yumenomori

○ 大熊町立 学び舎 ゆめの森（義務教育学校・認定こども園）

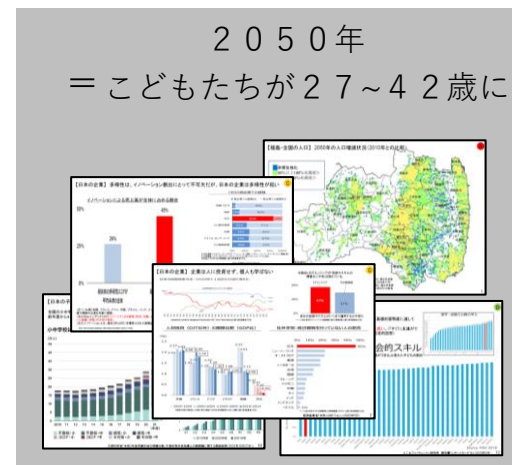
大熊への帰還、認定こども園の開園、新校舎移転による新たなスタートを迎え、どのような資質・能力の育成＝15歳での卒業時の姿を目指していくか、こども園と義務教育学校の教職員に加えて、卒業間近の9年生も参加して議論（2023年5月10日）。



ひとりひとりが夢や興味関心に熱中・没頭して「わたし」を育み、ゆめの森から互いを尊重しWell-beingを追究する市民社会を形成



2050年の予測データを読み解きながら、いま15歳が身に付けたい力を議論



○ 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

自らを変革し、
地域を変革し、
社会を変革していく
「変革者」を育成する

ふたば未来学園のMISSION

震災・原発事故に直面し、これまでの価値観、社会のあり方を根本から見直し、新しい生き方、新しい社会の建設を目指さねばならない

開校時に全教員でどのような18歳の姿を実現していくか議論
育成を目指す資質・能力をルーブリックで具体化



創造 協働

No	資質・能力・態度(まとめると)	レベル2	レベル3	レベル5
D 	表現・発信力 どのような場でも臆することなく自分の考えを発信でき、他者の共感を引き出せる。	<u>突然指名されたときでも憶せず、集団の前で、自分の意見や考えを相手に伝えるように表現することができる。</u>	データや事例を紹介しながら、自分の意見や考えを相手に伝えることができる。	多様な人々へ、 <u>熱意とストーリー</u> を持って胸に落ちる形で説得力ある発信を行い、共感を得ることができる。

追加	資質・能力・態度(まとめと)	レベル1	レベル3	レベル5
	創造力 自分なりの見方や好奇心を持って試行錯誤し、社会に新たな独創的価値を創造することができる。	アイデアを生み出そうと、自分なりの見方や考え方に基いた<u>観察</u>や思考を行うことができる。	目の前の課題に対して、これまでに得た知識や技術に関連づけながら、自分なりのアイデアを実現しようと行動できる。	<u>試行錯誤(創造のスパイラル)</u>を繰り返しながら、価値を更に発展させ、社会に新たな独創的価値を創造することができる。





アイスブレイクから始まり



シームレスにチーム創作へ。徐々に「お題」は増える



授業参観でチームごとに観客を巻き込んだ演劇を披露

中学校では3年間を通じて断続的にチームで活動。
自分と他者との違いに気づくこと、他者と対話を重ねること、協働すること、伝えるためのことば・身体・表情などの操作を試行錯誤すること、そして正解のない課題に取り組む楽しむことを通じて、**表現力**や**コミュニケーション力**、**創造力**を育成。
お互いの違いを認め合う寛容な学びのコミュニティの形成にも繋がっていく。

演劇教育事例② 演劇創作（地域の課題に向き合う）

ふたば未来学園での実践例



学び舎 ゆめの森
Manabiya Yumenomori

高校1年次ではグループで、町役場、商店、東電等を訪ね、復興に向けて地域が抱えている課題を調査し、その課題を対話劇で表現。

○ 分断・対立の構図に第三者として触れる

○ 演じることで状況に参加（追想）し、問題を我が事として捉える。

（実施スケジュール：2021年度）

9月～10月 東京電力広報担当者へのインタビューとフィールドワーク

10月 演劇創作 【担当者の願い・分かりあえない現実】

11月 漁業関係者への追加インタビュー

12月 演劇創作と表現 【分断・対立の構造を深める】

東電 「被災者が加害者になる」

漁師 「こいつらパチこいてる」「国民は知ってんのかね、安全だって」

東電 「伝えられる人、伝わっているからこそ大変な人、伝えたい人」

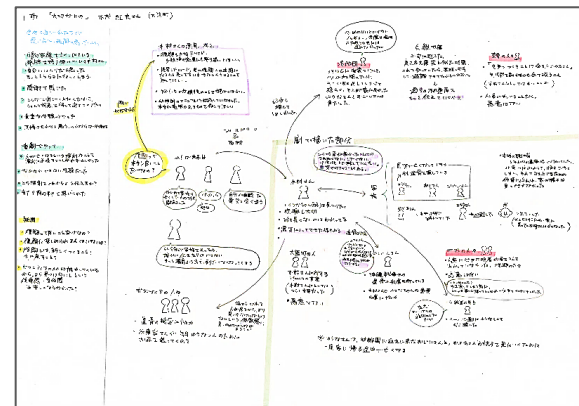
2021年度1年次3班作品『トリチウム』



『私は、ね、木なの。私はのびていくの。これが枝で、これは葉っぱなのよ。』 女の子は両手をゆっくりとあげ、指をひろげる。「ほら、風が私を揺すっているわ。』一すると『木』はかたむいて、指の葉っぱがふるえはじめる。」

子どもたちにとって演劇が身近であるもう一つの原因は、演劇と遊びがいろいろな面で結びついているからです。（中略）子どもたち自身で作品をつくり、即席で演じるとか、あるいは脚本をつくるとか、即興で役をつくってしまうとか（中略）これは全体的で興味深い遊びの準備ともいえますし、またその一部でもあるからです。（中略）子どもたち自身が自分の手で、即興的につくった脚本の方が子どもの理解にとって身近なものになるわけです。

エリ・エス・ヴィゴツキー、『子どもの想像力と創造』,新読書社, 2002



演劇教育事例③ 演劇創作（地域への公演）

学び舎ゆめの森での実践例



学び舎 ゆめの森
Manabiya Yumenomori

総合的な学習の時間、音楽、美術等の時間を活用し、子供たち・アーティスト・教員が協働してオリジナル演劇を創作。

その集大成として、避難を受け入れていただき12年間御世話になってきた会津若松の方々に、感謝を伝える劇『ゆめの森～雪の結晶は天から送られた手紙～』を上演。



会津からの旅立ちと大熊への帰還を「行ってきます！」「行ってらっしゃい！」の台詞で表現

予定

2023年

地域・一般向け公演

10月28日（土）

上演：13:30 開演

会場：学び舎ゆめの森

今春帰還した大熊で、豊かな大熊の人・もの・こととの「出会い」と「体験」を重ね、地域と向き合いながら演劇表現に取り組む。出会いでの共感を出発点として、身体表現に落とし込み、演劇表現を創造。解体工事で更地が広がり、コミュニティの分断にも苦しみ大熊で、子供たちが新たな大熊の物語を創造し、地域と共有。

生徒たちによる創作の活動に向け、本格的な舞台を鑑賞する機会を設定。
眼前で生成されるアーティストの演劇表現に触れ、自己や世界への認識が揺さぶられる体験をするとともに、舞台上での俳優同士や、舞台と客席の間で交わされる演劇を通じたコミュニケーションの力を体感。



「インディペンデンス」

※高校演劇作品を元にした創作舞台

2021年10月29日 ふたば未来学園
出演：演劇講師の劇団員（青年団等）
脚本：稲垣正治（都立大崎高校生徒）



アンドロイド演劇 さようなら

青年団＋東京藝術大学＋大阪大学ロボット演劇プロジェクト

2016年6月8日 ふたば未来学園
出演：ジェミノイド 村田牧子 梅津忠
アンドロイドの動き・声：井上三奈子

※ 近隣高校生徒や保護者・地域も招待

現代文『舞姫』の単元において、演劇を取り入れることで深く読む学習を実施。生徒たちは自分の担当場面だけでなく、全体を読み込んで人物像の把握に努めるとともに、他班の発表を見ることで前後の流れを確認し、自分たちの読み取りや解釈が妥当であったことを確認。主人公の心情の変化への理解も深まっていった。

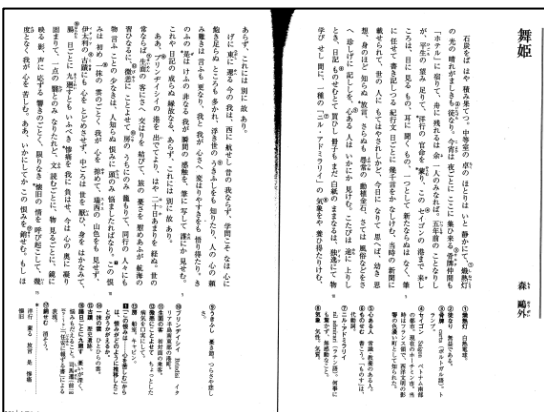
実施時期 2021年1月
 実施科目 「現代文B」（2単位）高校3年次
 教材 森鷗外『舞姫』（使用教科書 数研出版 現代文B）
 実施時間 全4時間（作品を読む・演劇作成3時間、発表1時間）
 授業展開

- ・全文を7つの場面に分けて、演劇を作成
- ・主人公の行動とその時の心情を別の生徒が演じる
- ・グループごとに担当場면을創作し、場面の順番に発表

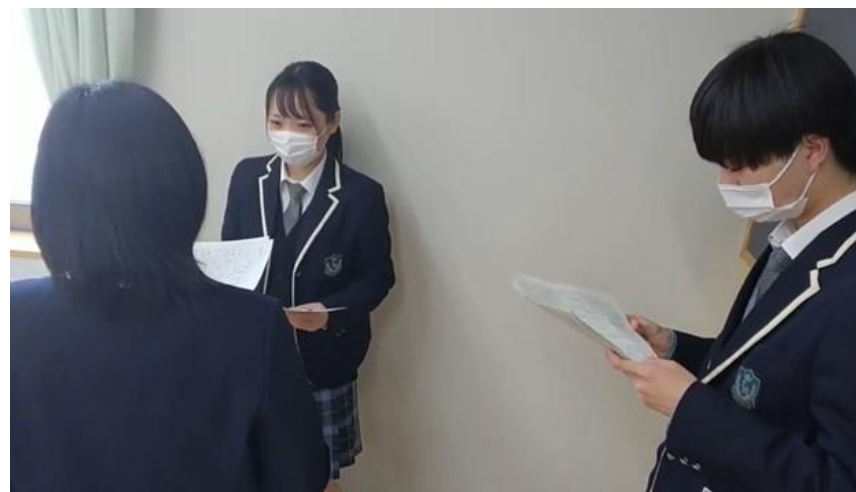
 ※主人公の演技と同期して、主人公の後ろや横で心情担当の生徒が心情を述べる。心情は勝手に想像するのではなく、本文の記述から丁寧に読み取る

生徒感想

- ✓ 本文では一文であっさり書いてある部分も、多くのことが想像できた
- ✓ 今回の読解方法を他の小説でも行くと内容がより理解できるのではないかと感じた
- ✓ どの班も工夫があり、内容が理解しやすかった／よくわかった



班毎に全体を読解しながら担当場面のシナリオを創作



発表前に創作した台本を読みながら動きをつける

演劇教育事例⑥ 教科横断的な取り組み

学び舎ゆめの森での実践例



学び舎 ゆめの森
Manabiya Yumenomori

演劇披露の舞台に向けて、アーティストの方とも協働し、音楽での歌声や身体を駆使して表現する学びや、図工での衣装製作の学びとも連動して舞台を創り上げる。



音楽では発達の段階に応じつつ、演劇の舞台の核となる合唱の技能や表現をみかく学習に取り組む



図工では衣装創作や、地域の方向けの案内チラシの作成等に取り組む。今後はその過程を冊子にまとめていく。



当校落成式（2023年9月21日）で集大成としての舞台を披露。子供たちのパフォーミング・アーツで式典を包み込み船出を祝う。

これまでの演劇教育での取り組みを一層充実させることを目指し、WWL※申請に際して、研究開発のテーマと関連した教科・科目設定の一つとして、教育課程特例として高等学校の教科「芸術」に学校設定科目「演劇」を設定し、音楽・美術・書道と並んで選択可能とする。音楽・美術履修者と協働したオペラ創作の構想も。

※ WWL：文部科学省WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

学校設定教科及び学校設定科目の設定届（抜粋）

1 設定する教科・科目の名称

教科名：芸術

科目名：演劇Ⅰ

2 設定する教科・科目の目標

演劇の幅広い活動を通して、演劇に関する見方・考え方を働かせ、表現コミュニケーション能力の向上、生活や社会の中の演劇への理解、演劇文化と幅広く関わる資質・能力を次のとおり育成し、WWLコンソーシアム構築支援事業の目標に掲げた、内発的イノベーションを起こすグローバル人材の育成に必要な創造力の伸長を図る。

(1) 演劇活動における言語を用いた表現、非言語による表現について理解するとともに、自己の身体覚を再発見し、表現コミュニケーション能力を身に付けるようにする。

(2) 舞台芸術に必要な、舞台美術・音響・照明・制作などの基礎知識を身に付けるようにする。

(3) 幅広い分野の舞台芸術の表現の豊かさや深さを自ら味わって鑑賞できるようにする。

(4) 演劇創作の活動を通して自己理解と多様性への理解を深めることにより、異なる価値観に対する寛容的な態度や、創造力を身に付けるようにする。

3 設定する教科・科目の内容

A 表現

(1) 演技・身体表現

(ア) 自己を知るための身体表現及びコミュニケーション技能

(イ) 登場人物の感情を捉えた表現

(ウ) 創造的な表現の構想

(2) 舞台技術

(ア) 舞台美術・音響・照明等に関する基本的な技能

(イ) 舞台美術・音響・照明等に関するプランの制作

(ウ) 創造的に表す舞台技術の構想

(3) 演劇創作

(ア) 戯曲の書き方

(イ) 演出のしかた

(ウ) 上演に向けた制作の構想

B 鑑賞

(ア) 劇作、演出、演技、舞台技術など、演劇を構成する要素の工夫の考察

(イ) 演劇の歴史や諸外国の演劇文化との比較

(ウ) 演劇が果たす社会的な役割の考察

2024年度
入学生より

これまでの福島県内での演劇教育の成果を踏まえ、県教育委員会は「学びの変革推進プラン(第7次総合教育計画の年次計画)」において「演劇教育により自己表現力や他者理解力育成のためのコミュニケーション教育を推進する(複雑な社会の課題を主体的に解決する力の育成)」ことを掲げ、県内小中高6校を「演劇によるコミュニケーション能力育成事業対象校(モデル校)」に指定。

また、県教育委員会はR4年度教員採用試験において「芸術分野：演劇」の特別選考を行い複数名を採用し、全県的な演劇教育による資質・能力の育成に着手。加えて、大熊町も独自に専任アーティストを採用して学校に配置し、創造的演劇教育を推進。

福島県は2022年度以降、複数校のモデル校を指定してさらなる波及を推進

コミュニケーション能力育成事業実施要項

福島県教育委員会

1 目的

第七次福島県総合教育計画において育成したい人間像として示された、社会や地域ができる人を育てていくためには、他者との対話や協働を通して、様々な立場や意見で共に生きていく力を身につけるコミュニケーション教育が不可欠である。本事業の対話の活動を通して、福島県の児童生徒の「自分の考えや思いを表現する力」「他者理解する力」の育成を目指すことを目的とする。

外部講師を活用した演劇及び哲学対話による教育活動を実践する中で、外部講師場をモデル校の教員等が参観することで、実践的指導力を有する教員の育成にもつ

2 実施方法

(1) 県教育委員会によるモデル校の指定

県教育委員会は、4に掲げる事業を実践するモデル校を小・中学校(義務教育等学校別に以下の方法で指定する。原則として、演劇については小・中学校(義務教育等学校3校、高等学校3校を、哲学対話については高等学校2校をモデル校に指定する

(2) 小・中学校(義務教育学校を含む)

大熊町立 学び舎 ゆめの森
専任アーティスト
(In house Artist)

木村 準



R4年度教員採用試験において「芸術分野：演劇」の特別選考実施

(4) 特別選考Ⅲ(スポーツ・芸術等特別選考)

ア 受験資格

高等学校教諭に応募し、次の a 又は b の要件を満たす者

- b 下記の芸術分野において、国際レベルのコンクール等に日本代表若しくはこれに準じる資格により出場した者、全国レベルのコンクール等において入賞以上の成績を収めた者又はこれらの者を指導育成した実績(経験)を有する者。なお、学校における教育課程に位置づけられた活動として、演劇のワークショップ等を通じた表現教育やコミュニケーション教育に、継続的に取り組んだ実績(経験)を有する者を含む。

募集する分野 スポーツ分野(種目)：レスリング 芸術分野：演劇

ウ 教員免許状の取得について

特別選考Ⅲは、出願時に高等学校教諭普通免許状を有する者又は令和4年3月31日までに取得見込みの者以外でも、上記アの受験資格を満たせば、出願することができます。

ただし、選考の結果採用内定となった者は、令和3年度末までに福島県教育委員会により、特別免許状の交付を受けなければなりません。

* 特別免許状とは、様々な分野において優れた知識や技術を有する社会人を学校教育に迎え入れ、学校教育の活性化を図る観点から設けられた特別免許状制度にもとづき、各都道府県教育委員会が授与する教員免許状であり、その都道府県においてのみ効力を有します。

特別免許状の交付を受けるためには、各都道府県教育委員会の推薦及び教育職員検定の合格が

「人と人との関係の芸術」である演劇を授業で学ぶことで下記の資質・能力が育まれている。

人間理解の深化

1. 自分を知り、他者を知る（自己理解／他者理解）

自己と向き合い自己理解を深めるとともに、他者の存在への理解を深め、自己と他者を肯定する態度や、違いを楽しむ寛容性を育てる。

2. 心を開く（自己解放／共感・寛容）

表現の土台である自己の身体と向き合い、身体性や身体感覚を取り戻し、開放的な心と身体を育てる。

表現・コミュニケーション能力の育成

3. 言語・非言語のコミュニケーションの力を体得する（観察、身体と言葉の調整）

言語・非言語の表現とコミュニケーションについて考え、他者の表現を受信する力と、他者を意識して自己の身体と言葉を自在にコントロールする能力を育てる。

4. 異なる価値観を越えて合意形成する（対話／協働）

コミュニケーションの基本である受信と発信のバランスを意識しながら対話を重ね、主体的に協働し、価値観の違いを超えて合意を形成する態度と能力を育てる。

創造力の育成

5. 独自の見方や好奇心を持って試行錯誤し、独創的価値を創造する

前提や思い込みを疑い、自分なりの見方や考え方に基づいて観察・思考し、より良い社会を目指してカオスと秩序の境目に立って※失敗を恐れずに表現・行動し、他者との違いを楽しみながら試行錯誤（創造のスパイラル）を繰り返すことで、経験を通じて価値観をアップデートしながら、新たな価値観、社会、人間関係を創造する態度と能力を育てる。

※「カオスと秩序の境目に立」つとは、前提や思い込みを疑い独自の「問い」を発する姿勢

○ 不確実な不利益とリスク分配の時代

VUCAな時代においては、不確実で混沌としたトレードオフ(二律背反)、ジレンマ(矛盾)、コンフリクト(葛藤)を伴う意思決定が連続。(利益分配の時代の終焉)

○ フィルター・バブル、 真実の相対化・バッシング増幅の時代

人々は同質性の集団へと分類され、バブルの中で声は反響・増幅し、反対意見に出会わず偏向。

SNSの「熱意の非対称性※」により真実が相対化。

(レネー・ディレスト)

※ 明白な事実を強調する投稿を書くのに何時間も費やす人は少ない一方、
熱狂的な陰謀論者や過激派は膨大な量のコンテンツを生み出す

○ ヴァーチャルの便益とアナログの切望

オンラインコミュニケーションにより時空間を超えたコミュニケーションとイノベーションが加速。
一方で身体性を伴うアナログ情報・体験の重要性も認識。



© Eli Pariser



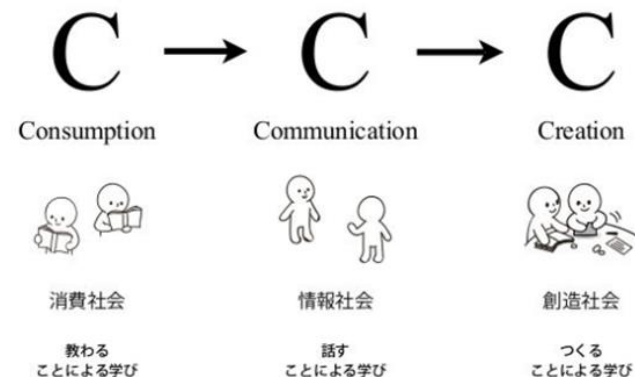
コロナ禍、オンラインでの海外研修(ふたば未来学園)

多様な他者と関わり、時には分断・対立の境界に立ちつつ、
言語のみならずノンバーバル(非言語)の表現・コミュニケーション力も駆使して
他者と共生・協働していく資質・能力が求められる

○ 「創造社会」の到来

これから本格化していくと思われるのが、「創造社会」と呼んでいる(中略)「創造」「つくる」ということが人々の関心や生活における中心的な関心となる時代である。創造社会においては、人々は、自分(たち)が作りたいたいと思うものを自分(たち)でつくることができるようになり、どれだけ自分が作りたいたいものをつくられているかが、生活・人生における「豊かさ」を象徴することになるだろう。

井庭崇『クリエイティブ・ラーニング』,慶應義塾大学出版会, 2019



○ 創造性を育むための4つの基本原則（4P）と「遊び（ティンカリング）」の重要性

プロジェクト
(Projects)

情熱
(Passion)

仲間
(Peers)

遊び
ティンカリング
(Play)

- ✓ 混沌とした世の中を観察する
- ✓ 前例やタブーに囚われずに問いを発する
- ✓ ティンカラーとして、対象をいじくりまわし
(TINKERING)、異なるアイディア・知識・技術等を
繋げ(Connecting The Dots)、試行錯誤を繰り返す

ティンカラーは、「しばしば、解決策に辿り着くために、曲がりくねった回り道を巡ります。しかし、効率を失う代わりに、創造性と俊敏さを得る」「レオナルド・ダ・ヴィンチからアレクサンダー・グラハム・ベル、リチャード・ファインマンまで、史上最高の科学者やエンジニアたちの多くは、自分自身を「(プランナーではなく)ティンカラー」だと見なしていた。」

ミッチェル・レズニック『ライフロング・キンダーガーデン』, 日経BP, 2018

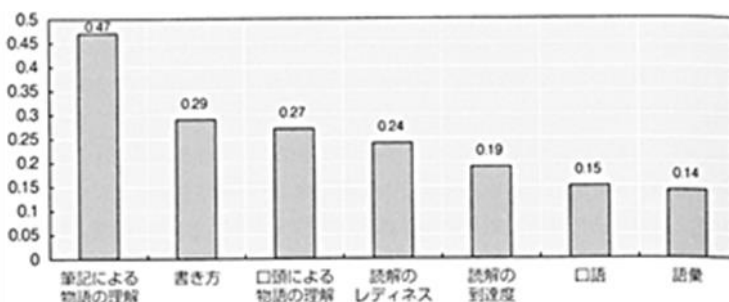
観察し、問い、試行錯誤を重ね（TINKERING）、
異なるものを組み合わせ（Connecting The Dots）
独創的な新たな価値を創造していく資質・能力が求められる

OECDの『Art for Art's Sake: The Impact of Arts Education』(2013)では、これからの社会においてイノベーションに影響を与えるスキルについて、これまでの学術的研究成果を鳥瞰し、音楽、視覚芸術、演劇、ダンス、マルチ・アートの教育の効果をそれぞれ科学的に分析している。この中で、演劇教育に関しては下記の知見が得られている。

○ 演劇教育と一般的な学力

読解力や物語の理解といった幅広い言語能力を高めるといふ、明確な因果関係を示すエビデンスがある。最も大きな効果は、筆記テストで測定された物語の理解で測定され、ただ単に読むよりもその物語を演じる方が、子供達の物語に対する理解が深まる。同時に、演じていない新しいテキストを理解するスキルも有意に成長しており、言語スキルに対して演劇教育がプラスのインパクトを持つことが示されている。また、演劇教育と数学の能力や、科学的概念の理解との相関を示す研究もあり、因果関係は研究中である。

演劇教育を通じた言語能力の向上：明らかな関係



注：「読書」を除くすべての結果が統計的に有利である。 出典：Podlozny(2000)。

○ 演劇教育と創造性

芸術教育は創造性を教えると考えられるが、創造性を測る方法に限界があり、エビデンスは少ない。その中でも、演劇とダンスについては、仮説を裏付けるエビデンスが存在する。

○ 演劇教育と社会的スキル

芸術分野が社会的スキル（自己概念、包括的な自尊心、社会的行動、他者への共感、感情の調整、及び他者の視点に立つこと）を高める点を証明しているのは、今のところ、演劇分野のみである。一部の研究は、演劇教育が共感性を向上させること、他者の視点に立てるようにすること、感情の調整を促すことを証明している。演劇教育では、生徒に他者の立場になって考え、心理的な状況を理解してみるよう指導が行われ、感情表現を教える。こうした演劇の訓練が、社会的認知的スキルを高める論理的な根拠が得られている。

※ 南郷注 近年では、兵庫県豊岡市全32小中学校で、演劇教育による非認知スキル向上のエビデンスも確認されている。

諸外国での演劇教育の実施状況

OECD加盟国の初等（ISCED1）及び前期中等（ISCED2）段階の カリキュラムにおける芸術教育の現状（2013年）

ISCED	視覚芸術		音楽		演劇		ダンス		工芸		メディア・アート	
	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
オーストラリア	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲			▲	▲
オーストリア	▲	▲	▲	▲	△	△	—	—	▲	▲	△	△
ベルギー (De.)	▲	▲	▲	▲			—	—				
ベルギー (Fr.)	▲	▲	▲	▲	△	△			△	△		
ベルギー (FL.)	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
カナダ (オンタリオ)	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲				
カナダ (ケベック)	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲				
チリ	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m
チェコ	▲	▲	▲	▲	△	△	△	△	△	△	▲	▲
デンマーク	▲	△	▲	△	△				▲	△	△	
フィンランド	▲	▲	▲	▲	—	—	—	—	▲	▲	▲	▲
フランス	▲	▲	▲	▲	—		—	—	▲	▲	▲	
ドイツ	▲	▲	▲	▲	△	△	△	△	▲	▲		
ギリシャ	▲	▲	▲	▲	▲	▲	—	—	▲	▲		
ハンガリー	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲			▲	
アイスランド	▲	△	▲	△	▲	△	▲	△	▲	△		
アイルランド	▲	△	▲	△	▲	△	—	△	△		—	
イスラエル	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m
イタリア	▲	▲	▲	▲							▲	▲
日本	▲	▲	▲	▲			—	—	▲	▲		
韓国	▲	▲	▲	▲	※	※	—	—	▲	▲		
ルクセンブルク	▲	▲	▲	▲					▲			
メキシコ	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m
オランダ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ニュージーランド	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲				
ノルウェー	▲	▲	▲	▲	▲	▲	—	—	▲	▲	—	—
ポーランド	▲	▲	▲	▲	—	—	—	—	—	—		
ポルトガル	▲	▲	▲	△	△	△	△	△				
スロバキア	▲	▲	▲	▲	△	△	△	△				
スロベニア	▲	▲	▲	▲	—	—	—	—	—	—	△	△
スペイン	▲	▲	▲	▲	▲	△	—	—	△	▲	▲	
スウェーデン	▲	▲	▲	▲	—	—	—	—	▲	▲	—	—
スイス	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m
トルコ	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m
イギリス (イングランド)	▲	▲	▲	▲	—	—	—	—	▲	▲		
イギリス (北アイルランド)	▲	▲	▲	▲	—	—	—	—	▲	▲		
イギリス (スコットランド)	▲	▲	▲	▲	▲	▲	—	—				
イギリス (ウェールズ)	▲	▲	▲	▲	—	—	—	—	▲	▲		
アメリカ	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲				

多くのOECD加盟国が 演劇を芸術教科等で扱っている

（扱っていない加盟国は日本を含め3か国のみ）

※ 韓国は調査段階では空欄(カリキュラムに含まれない)であったが、現在では初等 ISCED1 で必修の芸術教科(▲)、前期中等 ISCED2 で芸術の選択科目(△)

○ 我が国での扱いの現状

- ✓ 小中学校段階では学校単位のみならず地域単位での実施が広がっている

福島県小中高複数校

兵庫県豊岡市内全小中32校

兵庫県宝塚市内全小中35校 等

- ✓ 高等学校段階では様々な形で全国100校以上が実施（詳細調査中）

地域間格差や所得格差が 資質・能力の差に繋がる可能性

注 ▲: 必修の芸術教科であるか、必修の芸術カリキュラムの一部
△: 芸術の選択科目
—: 芸術以外の必修教科の一部
0: 学校の裁量で行っている m: データなし
空欄: 芸術がカリキュラムに含まれていない

出典

OECD教育研究革新センター編著『アートの教育学』（明石書店、2016）を元に南郷編集
Extended and updated by OECD countries. Based on Eurydice for European countries
and government policy papers for non-European countries.

【参考】大熊町立学び舎ゆめの森（義務教育学校・認定こども園）概要



学び舎 ゆめの森
Manabiya Yumenomori

○ ゆめの森のビジョンと背景

「わたし」を大事にし、

「あなた」を大事にし、

みんなで未来を紡ぎ出す。

東日本大震災と原子力災害という人類初の複合災害に直面し、翻弄された経験から、価値観・学力観を転換。

震災後、多くの分断・対立に直面するとともに、多くのあたたかい支援に支えられた大熊から、もっとも優しい社会を創り出していく。

自らが主人公となり理想とする未来を描き、他者とともに未来を創造する、学びと持続可能な地域実現の相乗効果を創出していく。

○ ゆめの森のあゆみ

2011年
会津若松市に園・学校が避難
同地で12年間教育活動を展開

2022年
学び舎ゆめの森としてスタート
（義務教育学校）

2023年
大熊町に帰還し学校再開
同時に認定こども園を開園
2学期より新校舎へ移転

○ 学校経営方針

町教育理念「温故創新」を踏まえ、時代の変化に先回りして対応し、アナログとデジタルの良さを生かし、個別最適な学びを保障。

「ゆめの森」の物語の創造

- ・「問い」から物語がはじまる 園児・児童・生徒が探究し、自分一人一人の唯一無二の成長の物語を創造する。
- ・共に物語を紡ぎ出す 保護者・地域・社会と学校とが関わり、自らの生きる物語と地域の物語を共創する。

哲学する学び舎

- ・教職員一人一人が探究する能動的市民 社会の未来と学びの未来を問い続け、自らの良さを生かし、互いの違いを力に変える。

○ 園児・児童生徒数

2023年7月10日現在、
赤字は2023年度中の転入による増（各学年の内数）

園	0歳	1歳	2歳	年少	年中	年長				計	合計
	1 ⁺¹	3	2	3 ⁺¹	1	1 ⁺¹				11	
学校	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	計	31
	4	2	2	0	4 ⁺¹	5 ⁺¹	1	0	2	20	

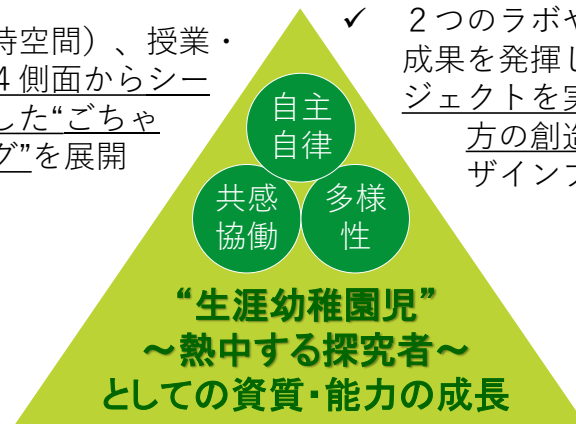
① 0歳からのシームレスな学び

認定こども園と義務教育学校の子供たちが共に学ぶ環境を生かしたシームレスな学びを展開。

- ✓ 幼児期の「あそび（内発的関心・問いからの没頭）」の力を伸ばし、学校の「学び」も教材を受動的に学ぶのではない内発的な「探究」へと転換
- ✓ 社会情動スキルの基盤を形作る幼児期から青年期まで一貫した理念とカリキュラム



- ✓ 理念、環境（時空間）、授業・行事、教員の4側面からシームレスに連動した“ごちゃまぜラーニング”を展開



② 学びのマネジメント

ICTを徹底的に活用した個別最適な学びにより、習得の状況を自覚しながら自らの学びをマネジメントする力を身に付ける。

- ✓ ひとり一台のタブレットで、AI型教材「Qubena」とスクール・コミュニケーション・プラットフォーム「ツムギノ」を活用し、知識の習得や授業外のコミュニケーションを加速



- ✓ 知識習得の時間を大幅に圧縮し、教科の視点から探究を深化させていく深い学びを実現
- ✓ 時間割を自ら組み立て、得意を伸ばしたり苦手に向き合う「学びのマネジメント」の力を育成

③ カリキュラムの柱～未来デザインの時間

※生活科・総合的な学習の時間

自らの「興味」と「問い」を出発点として、大熊の豊かな人や歴史に時間をかけて向き合い、各教科の知識や見方考え方も発揮して探究を深め、汎用的能力を育成。

- ✓ 大熊の自然環境や人と向き合いながら栽培・飼育・加工・販売等の活動を通じて、持続可能な大熊の未来像を探究する「ネイチャーラボ」と、演劇表現に取り組む「リベラルアーツラボ（演劇教育）」
- ✓ 2つのラボや各教科での学びの成果を発揮しながら各自がプロジェクトを実践し、自らの生き方の創造に繋げる「未来デザインプロジェクト」



④ 演劇教育～ゆめの森の物語の創造

地域と向き合いながら演劇表現に取り組み、自己肯定感や表現力、協働力や創造力を磨くとともに、新しい大熊の物語を紡ぎだす。

- ✓ 専任アーティストが学校に常駐し、4C（クリエイティブ、コミュニケーション、コラボレーション）の力を育成
- ✓ 他者との出会いでの共感を出発点として、身体表現に落とし込み、演劇表現を創造
- ✓ 解体工事で更地が広がり、コミュニティの分断にも苦しむ大熊で、子供たちが新たな大熊の物語を創造し、地域と共有



【参考】ふたば未来学園中学校・高等学校（総合学科高等学校・併設中学校）概要



復興や全国・世界で活躍する人材の育成を目指し、多様な系列を擁する総合学科の高等学校と併設中学校からなる中高一貫校として2015年開校。地域課題解決の探究学習を軸としたカリキュラムで、地域や社会を変革する「変革者」を育成。

中学校（平成31年4月開校、定員60名/学年）

一般選抜生

深い学び・高い学力

- 各教科での深い学び
- 習熟度別学習
- 国語・数学の授業時数増

世界に飛び出す学び

- 本校独自のグローバル・スタディ科の開講
- 海外研修での発信

未来の主人公となる学び

- 哲学・熟議
- リーダー学
- 演劇・コミュニケーション

スポーツ選抜生(ビクトリープログラム)

世界に通用する真のアスリートの育成

- 中高一貫、授業トレーニングでの高い競技力・人間性の育成
- バドミントン、レスリング

高等学校（平成27年4月開校、定員160名/学年）

アカデミック系列 ACADEMIC



探究と各教科の往還による深い学びを通して、高い学力、実践的英語力も含めた様々なスキル、人間性を身につけ、海外大学や国公立・私立難関大学への進学を経て変革者として社会を牽引するリーダーを育成。

トップアスリート系列 TOP ATHLETE



双葉地区教育構想※が掲げる「真の国際人として社会をリードする人材の育成」を目指し、バドミントン、レスリング、男女サッカー、野球の各種目でトップアスリートや生涯スポーツ社会のリーダーを育成。

※ 正式名称「双葉地区未来創造型リーダー育成構想」、関係団体（県、双葉郡各町村、JFA等の競技団体、大学等）の連携により平成18年度にスタートした人材育成プログラム。

スペシャリスト系列 SPECIALIST



農業 Agriculture

実践的・体験的な学習活動を通じて、栽培から加工・販売まで幅広く総合的に学ぶ。



工業 Industry

電気、機械、再エネ等を学び、消費者視点のものづくりや課題解決を実践。



商業 Business

簿記・会計等の資格取得に取り組むとともに商品開発やソーシャルビジネスを実践。



福祉 Care and Welfare

介護施設と連携した実践的な実習を行い、介護職員養成研修などを受講・修了。

育成
人材像

グローバルに考え、
世界で活躍する人材

新たなビジョンを示し課題
解決をけん引するリーダー

新たな産業を創出する
イノベーター

地域で持続可能な社会
づくりを進めるリーダー

トップレベルで
活躍するアスリート

中間整理（たたき台）

1. これからの社会で求められる文化芸術教育の在り方

（芸術科における学びの在り方）

- 芸術系教科等の本質は答えを自分で作りだしていく学習であり、Society5.0 の時代と言われる、これから先の不確実な、見通しがなかなか持ちにくい社会の中でこそ重要。
- 芸術教育は、単純に絵を上手に描くことができるようになるとか図画工作で何かを上手に作ることができるようになるだけではなく、思考錯誤しながら背後にある本質を見出したり、それを自分なりの言葉でストーリー化したり、コンセプトを作る、哲学を表現するなど答えが1つでないものを創るものであり、すべてのイノベーションにとって非常に重要なものである。
- 芸術教育は、作品づくりが目的ではなく、作品を作り上げる過程で、自分なりの見方、考え方を作っていく、答えを作っていくもの。
- 生成系AIのようなシステムがかなりのスピードで進化していく中で、生成された絵などがどういう過程を経て出来上がっているか我々には分からない。芸術教育の重要なところは、アウトプットされた最後だけではなく、そのプロセスにどういう学びがあるのかということ。特に表現や鑑賞の学習活動のプロセスを一層重視すべき。
- STEAM 教育の中でもアートは創造的な発想に大きな役割。STEAM 教育は学校だけで閉じてしまうのではなく、美術館など様々な周辺のリソースとの連携・協働が必要。そういう中で生徒や地域の実態に応じた教科横断的な学習や探究につながっていくことが重要。
- 芸術は言語が違ってても他国の人たちと意思を通じ合ったり、多様な文化の違いを理解したりすることができる。自国も含め文化の理解に芸術教育の果たす役割は非常に大きい。
- 子供たちは、芸術の学びを通じて、他者の感じ方、表現の仕方に触れ、他に興味を持つという態度が見えてくる。これは文化理解や他者理解にもつながるのではないかな。
- 鑑賞教育は、自分とは異なる他者のものの見方、考え方への理解、他者との共生に自然とつながっていくものであり、また、自分の内側にある認識や思い、感情に新たな気づきを引き起こすもの。答えを探すだけでなく、空想や想像を働かせて主観を深めていくような探求活動も重要ではないかな。

- 子供たちが学校での学びを通じて、生涯にわたって自分から音楽と関わり合う姿や機会を求め続け、幸せで豊かな人生を送ることができるようになることも重要。
- アーティスト等のキャリアの多様化を発信していくことで、子供たちが自分と関係ないと思っているところから、芸術文化に当事者として関わっていくことにつながるのではないかな。
- ゲーム制作ではプログラミングができないと作品が完成せず、理工学的な教育も必要になってきている。芸術表現はますます分野横断的・複合的になっており、文化芸術教育は一つのジャンルにこだわらず広く捉えられるべき。
- 文化芸術の価値が教育現場でも社会一般でも十分に伝わっておらず、そもそも文化文化に創造的に触れる機会も発信の機会も少ない。芸術教育において、コンセプトやストーリーをつくるとか、キュレーターの視点の育成といった実践的な学びも必要ではないか。そのためには、まずは実証事例を創出することが重要。
- 芸術文化は、障害の有無、経済的格差、地域の違い、ジェンダーなどに関わらず、多様な個性を発揮し、創造できる場であるが、そのことが十分に発信されていないのではないかな。
- 学校教育における誰一人取り残されない文化芸術活動を実現するため、障害のある児童生徒に対する工夫が必要。
- カリキュラムマネジメントによって、必ずしも専門学科だけではなくても様々な学校で美術を中心とした STEAM 教育を展開することが可能。総合的な学習の時間で各教科をつないでいく中で、芸術ならではの働きを意識したカリキュラム編成が重要。
- 芸術教育の充実が家庭の環境にも大きく影響される部分もあり、なおさら学校教育において全ての子供たちに芸術教育をどのように行うかが非常に重要な問題。

（日本文化の学びの在り方）

- 日本文化を学ぶことは、我が国の伝統や文化を尊重する気持ちやアイデンティティの育成に加え、生活態度の改善、思いやりや規範意識、学力向上といった効果も期待できる。
- 国際理解教育とは本来、単に海外のことや英語を学ぶだけではない。我が国の伝統や文化の教育が、結果的には世界の諸国家・諸民族との共生の態度を育成することを目標とする国際理解教育に発展していくと期待できる。
- 日本は日本のよさや日本の伝統文化、現代文化を発信していくことが苦手であり課題。受信型から発信型の国際化を図っていくためには、学校段階での日本文化の教育が非常に重要。

- 芸術系教科等においては、伝統の中にこれからの時代にとって価値のあるものを見だし、一人一人の手で継承し新たな価値や文化を積極的に創造していこうとする気持ちを持たせることが重要。
- 音楽科では、中には自分は向いていないと思ってしまう子もいるが、伝統的な音楽を体験する活動だと子供たちはフラットの状態、個性を生かして表現したり鑑賞したり、自分の生活や文化、体験と照らし合わせながら学ぶことができている。
- 芸術系教科等においては、伝統文化の意味や役割を理解させるとともに、芸術文化の幅広い理解と、それらを大切にしていこうとする態度を深めることを今後一層目指す必要がある。
- 学校において伝統や文化の計画的・系統的な指導が必要。
- 現在の伝統文化に関する学習は、「未来に向けて自分たちは伝統文化をどうするのか」といった自分事として考えさせることや、未来志向につながる指導は十分とは言えない状況。「尊重するとともに、継承・発展させる」についての指導が弱い状況がみられるのではないかな。
- 日本の映画、漫画、アニメ、ゲームは、現代文化として世界から評価されており、子供たちも関心を持っているが、学校教育の中でこういった現代の日本文化を体系的に扱うことは弱いのではないかな。
- 国内文化の背後にある本質的な美意識や思想、具体へ興味・関心を醸成するためにも、万博の活用も含め、他地域や海外との文化交流・発信の機会の醸成が必要。祭りや民俗芸能、民族工芸の重要性の発信・生きた出会いを支援すべき。
- お祭りなど地域の民俗芸能と連携した教育活動を、海外との交流も含め推進すべき。

2. 本物の文化芸術体験と ICT の活用による効果的な学びの在り方

(本物の文化芸術体験)

- 本物には、単に本物の作品と出会うだけではなく、アーティストの生き方や制作プロセスに触れることも含まれる。作品をつくって終わりではなく、活動をハブとしてアーティストなど外部人材と連携し、様々な本物を体験できるプログラムづくりが重要。
- 授業の中で子供一人ひとりが実際に楽器を演奏してみるといった表現する活動も本物の一つであり、子供の発達段階に応じて表現と鑑賞を組み合わせていくことが必要。

- 子供たちがどの地域でも本物の楽器に触れ、経験・体験できるよう、楽器を充実していくことも重要。
- 美術館の中のアートも本物だが、美術館の外でまだ発見されていない美を自分なりに見つけることにも価値がある。
- 本物の文化芸術体験は障害のある児童生徒にも意義のあるものであり、持続可能な取組としていく必要があるが、一方で芸術系教科等の限られた授業時数の中で本物に触れる時間を確保していくことは難しく工夫が必要。
- 巡回公演で本物に触れることは子供たちの心に強く印象に残り、映像やCDでは得ることのできない、五感すべてで臨場感や迫力を感じ、感動体験につながる。子供たちのキャリア教育にもつながるもの。しかしながら学校単独では実施が難しく、一つでも多くの学校において巡回公演の機会が得られるよう国として支援があると良い。
- ホールや美術館、博物館などの環境が整ったところで生の芸術体験をさせてあげることが重要だが、地域によっては難しい場合もある。地域の人材や色々な資源を活用して、地域一体となってそうした機会を提供することが考えられるのではないかな。
- 巡回公演については非常に良い取組であるが、そもそも知られていない現状があることや、これまでも改善されてはいるが、学校側、アーティスト側から事務手続等が煩雑で負担があることや対象経費についても使いづらいとの指摘があり、更なる改善が必要。
- 巡回公演でのワークショップを通じて関心を持った子に対して、文化芸術に関心を持ち続けられるよう、芸術家や文化に関わる人がサポートできるような仕組みができると良いのではないかな。
- 障害のある子は、どうしてもじっとしていられなかったり、感動して声が出たりと、保護者の方も他のお客さんに迷惑ではないかと心配して本物に接する機会が少なくなりがち。フルスペックでなくとも少人数編成等の工夫により、障害のある子にもできるだけ本物の公演に触れる機会を増やしていただきたい。

(ICTの活用)

- 学びの過程を重視することが重要であり、ICTやタブレットを使った学習と、アナログでの学習は選択肢として共存していくことが必要。
- ICTの活用と、実物を見たり実際に触れたりする感覚を直接感じ取らせる活動や身体活動とはバランスを取りながら教育活動を展開することが重要。
- 端末が楽器や画材となるなど、自己表現の可能性を拓けるワクワク感が芸術系教科等でのGIGA端末の活用には必要。現在の一人一台端末のスペックやコンテンツでは実現できるものとはなっていないのが現状。

- 障害のある子には、どうしても外に出にくい子もいる。実物での鑑賞も重要であるが、Web 上の鑑賞の機会を設けることも重要。子供たちの作品も全国の特別支援学校、特別支援学級から鑑賞ができるよう、Web を活用した作品展も考えられるのではないかな。

3. 教員の指導力の向上と外部人材等の活用

(教員の指導力向上)

- 管理職だけではなく、先生方が他の教科との連携をより一層考えることによって、子供たちの資質・能力の育成に大きく寄与するのではないかな。
- 非常勤の先生方に対してもオンラインで研修が受けられるなどあればもっと充実していくのではないかな。
- 教師側も正解がない問いを出して子供たちの創造性を引き出していく必要がある。
- 音楽の楽しさだけではなく音楽活動の楽しさを体験するということを授業者としてはやっていかなければいけない。情報を与えるではなく、音楽のよさ、面白さ、美しさは何だろうと子供から引き出す視点も、研修の中で重要になるのではないかな。
- 音楽科の学習は AI で成し遂げることができないものを生み出すという認識が生徒にはある。児童生徒や教職員が芸術系教科等の本質、その存在意義や重要性について意識してもらえるように、芸術系教科等の教員が発信するということが非常に重要。
- 高等学校では必ずしも芸術科の存在意義や重要性についての認識が十分ではない可能性がある。だからこそ、特に義務教育段階から、芸術系教科等の更なる充実と存在意義を子供たちや教員にもっと周知徹底する必要がある。
- 小中学校は総合的な学習の時間、高校は総合的な探究の時間で、外部人材の協力も得つつ、伝統文化や日本の文化を題材として取り入れていけば、おのずから教員の指導力向上につながるのではないかな。
- 部活動の中で文化芸術活動が育まれている要素が非常に大きい。教員の指導力向上については部活動改革の状況も踏まえた視点が必要。

(外部人材等の活用・地域連携)

- 教員は非常に多忙であり、伝統文化や日本文化の指導に外部人材の協力が重要。
- 文化や芸術を創る人・楽しむ人と、そもそも関係がないと思っている人との分断、学校と文化・地域との分断があるのではないか。学校と地域、伝統芸能やアーティストとをつないでいくコーディネートする存在を支援していくことが重要。
(祭り×学校×ものづくり、民族芸能×学校、アーティストコラボによる創作など)
- 学校の中で閉じずに社会に開かれた教育課程という観点から、美術館と連携した教員の指導力向上に取り組むべき。
- 美術館は単に見に行く場所から色々いじくりまわせる（tinkering）場所に変わりつつある。学校が外部と連携することで、学校外に良い変化を与えることも期待できる。
- 特別支援学校では、障害のある子供の作品を地元の銀行や店舗、郵便局や喫茶店に展示して、地域の方々から理解を得る取組も行われている。学校と社会とのつながりとしてもこうした取組が常時できると良い。地域の方との協働にもつながる。